

患者・家族が求める退院支援への取り組み

かがわ総合リハビリテーション病院 看護・療育部 回復期リハビリテーション病棟

看護師 樋本 知美、大林 善美、畝木 美保

キーワード；退院支援、退院後の困りごと、人材育成

要 旨

回復期リハビリテーション病棟では、自宅退院を目指し、入院早期から退院後の生活を見据えた退院支援を行ってきた。また、退院後の患者・家族に聞き取り調査を行い、それをもとにカンファレンスを行っているが、患者・家族の困っているという声を聴くことがあった。今回、その内容をスタッフ側、患者側双方の聞き取り結果から分析し、患者家族が求める支援とスタッフが不足ととらえている支援についての関連を考察した。その結果、患者家族が求める支援を行うためには、家族の状況による介入困難を意識して退院支援ができる人材育成の必要性が明らかになった。

1. はじめに

回復期リハビリテーション病棟における退院支援とは、後遺症を持ちながらも、その患者・家族が、豊かで新しい生活を構築できるための準備を整えることといえる。A病院回復期リハビリテーション病棟(以下A病棟と略)では、自宅退院となった事例に対し、患者・家族に退院1ヶ月後に、電話による聞き取り調査を行っている。また、退院支援に関わる理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・看護師・MSW(以下スタッフと略)に対して、評価用紙を使用し、退院支援の振り返りを行っている。その結果、患者・家族は生活場面で何らかの困りごとが起きているとの回答がみられている。スタッフは患者の全体像の把握は出来たと評価している反面、家族へのアプローチや介護計画・指導への不足を感じていた。これは、患者・家族の退院後の生活における困りごとと深く関係しており、退院支援が患者・家族の退院後の生活に則していなかったのではないかと考える。

藤井は回復期病棟における退院支援は、患者・家族が現状を理解し、意思決定を行うための支援である。退院後の予後予測や暮らす地域社会の状況についても正しく理解できるように支援する必要がある¹⁾。と述べている。また、宇都宮は、退院後の生活

をイメージした退院指導や退院支援能力を育成する教育プログラムが必要である²⁾。と述べている。そこで、患者・家族が実際の生活場面で困っている状況とスタッフが不足ととらえている退院支援の関連について明らかにし、患者・家族が求める退院支援について示唆を得ることを目的とした。

2. 研究方法

(1) 本研究における用語の操作的定義

①退院支援：患者・家族が主体となって退院先や退院後の生活について適切な選択を行う事ができ、かつ、患者・家族が退院後に安定した療養生活を送ることが出来たり、希望する場所で最期を迎えることが出来るよう、病院内外の多部門・他職種が協力・連携して行う、意思決定支援、退院先の確保、地域の諸サービスのコーディネート、患者・家族への教育等の活動プログラム

②退院後評価：A病棟における、退院支援内容のスタッフ自身による振り返り及び自己評価全般

(2) 研究デザイン：質的帰納的研究

(3) 研究期間：2016年8月～12月

(4) 研究対象者：自宅退院した38事例とスタッフで同意が得られた者。

患者・家族に対して本研究の説明文および同意書

を郵送し、返信を持って同意とした。

スタッフに対して口頭と書面にて本研究の説明を実施し同意を得た。

(5) 調査方法：患者・家族へ退院1か月後の生活状況についての入院中の受け持ち看護師もしくは受け持ちセラピストが電話による聞き取り調査を行った。質問内容は①患者・家族の体調、②退院後の生活で困っている事、③介護疲れの有無、④退院時の設定と変更した状況、⑤入院中に聞いておきたかったこと、⑥転倒の有無、⑦現在の家族の目標とした。スタッフに対しては退院後評価用紙にて①チームとしての働きかけ、②目標の見直し・修正、③家族へのアプローチ、④介護指導計画の立案・見直し、⑤患者の全体像把握を「できた」「できていない」「どちらでもない」の3段階評価とし、自由記載欄も設け、記載後、研究担当者に手渡してもらった。

(6) 分析方法：電話での回答内容から退院後の生活場面での困り事について語られている文脈を抽出し、抽出した文脈を1つの内容で区切り、1内容を1データとした。1データ毎に要約、コード化し、サブカテゴリー、カテゴリー化した。分析にあたっては、研究者間の意見が一致するまで話し合いを重ね、信頼性と妥当性を確保した。また、退院後評価用紙(1)~(5)の項目での自由記載に書かれている内容のうち患者・家族の困り事と関連する項目を選択し、聞き取り調査と同様にカテゴリー化し、分析にあたり同様に信頼性と妥当性を確保した。

3. 倫理的配慮

研究参加者に研究の目的、自由意志での参加であること、研究を断っても不利益はないこと、個人が特定される恐れはないこと、得られたデータは当研究以外には使用しない事結果を公表する予定であることを文章を用いて説明し同意を得た。本研究は当該倫理委員会において倫理審査を受けて承認を得た。なお、本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業はない。

4. 結果

患者・家族への聞き取り調査から、26 記録単位、

18 コード、9 サブカテゴリーから、4 カテゴリーが抽出された。各カテゴリーは【身体的障害による生活範囲の縮小】、【食生活の乱れ】、【高次脳機能障害への対応の困難さ】、【住宅環境の不備】と命名された。またスタッフによる退院後評価項目で、患者・家族の困りごとに関連する項目は、③家族へのアプローチ、④介護指導計画の立案・見直し、⑤患者の全体像把握であった。

退院後評価の結果「どちらでもない」に記載された内容は、客観的視点において「できていない」に該当していた。患者の全体像把握は63%が「出来た」と答えたが、家族へのアプローチ、介護指導計画の立案・見直しは65~72%が「出来ていない」と答えている。自由記載から得られたデータは、76 記録単位、21 コード、11 サブカテゴリーから、4 カテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーは【 】で、サブカテゴリーは< >で示す。各カテゴリーは<介入時期の遅れ>、<指導回数の不足>、<積極的な介入の不足>から【スタッフの介入不足】と、<忙しくて時間が取れない>、<体調不良>、<面会に来ない・来られない>、<家人の高齢化>、<面接指導の困難>から【家人の状況による介入困難】と、<ADL・認知に問題なし>、<家人による介助は困難と判断>から【家人への指導不要と判断】と、<専門職への振り分け>から【他職種に介入を依頼】と命名された。

5. 考察

患者・家族への聞き取り調査から、患者・家族は麻痺による生活上の不便さ、生活範囲の縮小を実感しており、認知面に関しても家族は患者への対応に困惑している状況が窺える。また、スタッフの退院後評価の結果からも「家族へのアプローチ」、「介護指導計画の立案・見直し」が出来ていないと65~72%が答えていることから、指導不足が存在していると言える。

伊藤は、回復期リハ病棟では、入院早期から、生活の再構築に向けた支援はもちろん、退院後の起り得るトラブルを含めた、退院後の生活を具体的にイメージした指導が重要³⁾。と述べている。A 病棟では退院後の聞き取りにおいて【高次脳機能障害への

対応の困難さ】、【食生活の乱れ】が退院後の生活で困っている事として上がっており、退院後の生活で起り得る問題に対する指導が不十分な事が唆される。そのため、これらに介入できるようになることで、家族は起り得る問題に対する準備が出来、患者・家族の困りごとが減ると思われる。

また、松添らの研究において、うまく退院支援が出来なかった原因は、スタッフの退院支援の方法ではなく、患者や家族の要因であると捉えているということが問題点として明らかになっている⁴⁾。A病棟においてもスタッフは、退院支援が十分に行えない要因として、【家人の状況による介入困難】が大きいと感じていることが明らかになった。【家人の状況による介入困難】の理由として、<家人の高齢化>の為指導回数が必要であることや<忙しくて時間が取れない>などの時間的な事をあげており、指導の限界と捉えている事が窺える。戸村らは、退院支援の役割を果たすためには、正確な病状予測、地域資源の知識、家族介護力の見積もり、患者・家族の退院に対する認識の理解などの専門的な知識や技術を有している必要がある。その為、実践能力を効果的・効率的に向上させるためには、系統的・継続的な教育を行う必要がある⁵⁾。と述べている。回復期リハ病棟においては、患者・家族の退院後の生活を見据え、家族を含めた退院支援は必須で有り、【家人の状況による介入困難】を指導の限界ととらえる事なく退院支援が出来ることが求められる。よって、患者・家族が求める退院支援を実現するためには、患者側の要因に左右されることなく退院支援ができるように、退院支援能力を育成する教育プログラムの構築が必要と考える。

6. 結論

(1) 退院後患者・家族が【高次脳機能障害への対応の困難さ】【食生活の乱れ】など基本的な生活において困っている事が分かった。

(2) スタッフは、家族へのアプローチ、介護指導計画の立案・見直しが「出来ていない」が65～72%と高く、【スタッフの介入不足】が明らかとなった。

(3) スタッフの介入不足】の原因として、【家人の

状況による介入困難】があると感じている事が分かった。

(4) 【家人の状況による介入困難】を意識して退院支援が出来る人材育成の必要性が、明らかになった。

【出典先】

平成29年度かがわ総合リハビリテーションセンター研究年報

【引用文献】

- 1) 藤井幸代：回復期リハビリテーション病棟における退院支援成功への道！，リハビリナース 2016年 vol.9 No,01
- 2) 宇都宮宏子：退院支援ガイドブック，学研，2016年
- 3) 伊藤由美：まるっと 1冊リハビリ病棟の退院支援，メディカ出版，2013年
- 4) 松添サチ辻本真由美：50 回復期リハビリテーション病棟の退院支援における問題点，日本看護学会論文集，慢性期看護，2016.
- 5) 戸村ひかり：日本の病院における退院支援看護師の実践状況，日本看護科学会誌,2017